

# 『ドリトル先生航海記』考

動物が活躍する

子どもの文学の魅力を探る

首藤美香子

子どもの文学には、動物の愉快なキャラクターが活躍するものが多い。『クマのプーさん』『バンビ』『フランダーズの犬』『三匹の子豚』『ひとまねござる』『ピーターラビット』など、題名に動物名を冠するものだけでも、すぐにこれくらいは挙げられるだろう。

なぜ、子どもの文学の構成に動物が重要な役割を果たすのだろうか。動物と子どもの親近性は、どこに求められるだろうか。これらの問いは、子どもを主たる読み手とする文学と大人向けの文学との質の違いを探る上で、とても意味があることのように思われる。

しかしこの大きな課題に取り組む前に、動物が活躍する子どもの文学の魅力を探る手がかりを考えてみたい。そこで本稿では、従来論評される機会の少なかった、『ドリトル先生航海記』に注目してみよう。

私自身、初めてこの作品に出会ったのが、語り手

の少年トーマス・スタビンス君と同じ十歳のころだったからだろうか。ドリトル先生の本を手にする度に、待ちこがれていた夏休みがやってきたような解放感で、胸踊らせたものだった。世界で唯一人物語を話せる医学博士にして、大博物学者であるジョン・ドリトル先生とその家族の動物たち、経験と機知に富んだ二〇〇歳のオウムのポリネシア、勇敢で忠義に厚い犬のジップ、食いしん坊の愛すべき豚のガブガブ、運動神経抜群のサルの手ーチーと一緒に南の島の大冒険は、まさに私自身の旅でもあった。

だから私には、大航海に出かけられるトミーがうらやましくてしかたがなかった。第一学校に行っていないから、読み書きの宿題やら遊び仲間との付き合いにわずらわされずに済む。トミーには、ママが疎んじるような、なんともうさん臭い仕事や過去をもった友達、貝ほりのジョーやネコ肉屋のマシュー、世捨て人のルカがいる。立派な先生の眼鏡

に適い弟子にしてもらったおかげで、父さんの跡を継ぐための靴屋の修行を積まなくてもいい。トミーは、普通の子どもたちを縛るもの、学校や教室の仲間、家族からもまったたく自由で見知らぬ世界へと旅立つことができるのだ。

では、この怠け者やろくでなしを意味する「ドリトル」先生のお話しは、どうやって生み出されたのだろうか。

作者のヒュー・ロフティング（一八八六一一九四七）は、イギリスのメインヘッドに生まれ、小さいときから自然や動物が大好きだったという。事もあろうに、押し入れのなかに自分だけの小さな動物園をつくり、家族をびっくりさせたこともあったらしい。十六歳のときアメリカに渡り学問を修めた後、土木技師としてカナダ、アフリカ、キューバの鉄道建設に従事した。動物と人間の共生を主題とした作品を書くきっかけとなったのは、第一次世界大戦でアイルランド将校としてオランダに出征していたと

き、戦地から二人の子ども（エリザベスとコリン）に送った絵物語だったとされている。帰国後も、せがまれるまま子ども達の就寝前にしてやっていたお話が、偶然ある詩人の目にとまり、出版の運びとなったらしい。

『ドリトル先生航海記』（一九二二）はシリーズ十二作のうちの第二作目にあたる。この作品は『ドリトル先生』シリーズに共通するおもしろさのエッセンスが凝縮していると思われる。したがって要約するのは難しいが、とりあえずあらすじをたどってみよう。

ある日の夕方、トミーは急に降りだした大雨に慌てて家路に向かおうとして、どんとぶつかった相手がドリトル先生だった。大けがをしたリスを救えるのはドリトル先生しかないと伝え聞き、先生が旅行から帰ってくるのを待ち焦がれていたトミーは、早速先生の家を訪問する。先生の家は、家政婦役のアヒルのダブダブを中心に動物たちがすべて管理して

おり、庭には一匹で二つの頭をもつオシッコサレツの珍獣などが住む動物園があり、すっかり心を奪われたトミーは、先生の弟子となり博物学の勉強に励むようになる。

どんな動物の言葉をもマスターした先生は、目下貝の言葉を学習中であつた。ある種の貝は、我々が知っているうちで一番古い時代から生き続けており、貝語を話せるようになれば大昔の世界がどんなだったかわかるという。

そんなとき、かねてから紫ゴクラクチョウを使者に通信していたロング・アローがクモサル島で消息を断つたとの知らせが入る。ロング・アローは、各地を放浪する博物学者で、ダーウィンよりもキューヴィエよりもすぐれているとして先生が敬愛しているインディアンであつた。海底の秘密をさぐる次の航海の行き先は、偶然にもこのクモサル島に決まる。

密航者の邪魔が入ったりして旅は最初から困難続

きだが、途中水族館から脱出したフィジットという魚から、大ガラス海カタツムリの存在を教えられる。大ガラス海カタツムリこそ先生が探していた貝で、アマゾン川の川口そばの「深い穴」に住み、七年以上も生きつづけているという。

悪天候で難破しながらも、「ドリトル先生といっしょなら、いつだって安全です。」「先生は、いつも運のいいおかたです。よく困難に出会いますが、たいていは、終わりにつごうよくゆくようになるのです。」というポリネシアの言葉どおり、無事クモサル島に到着する。

一行は、カプト虫のジャズベリーの足に結び付けられていた葉に助けを求めるロング・アローの絵が記されていることに気付き、ロング・アローらが閉じ込められている鷹頭山の洞窟を見つけ出す。みんなの協力で洞窟をふさいでいた岩戸はまっぶたつに割れ、二人の大博物者の劇的な会見がワシ語で行われる。

クモサル島での先生は、浮島となって南極ちかくまで漂流している島をくじらに頼んでもとの位置に返してもらったり、ポプシペテルの民族に火の文化を教えたり、隣族バグ・ジャグデラグとの戦争の仲裁を行ったり、病人の治療にと忙しい。とうとう選挙で王様選ばれてしまう。即位式の日、ささやき岩と呼ばれる劇場で先生が王座についた瞬間、伝説通り火山にかかる石が噴火口にころがり落ち、クモサル島を浮かせていた空気室を破り、島は静かに沈み漂流をやめる。

良き王様として政治に専念しはじめた先生は、ますます博物学の研究のひまがなくなり、故郷バドルビーに帰る見込みがなくなる。しかし、島の海岸に大ガラス海カタツムリが傷つき横たわっているのを見つける。イルカ、ウニ、ヒトデの通訳を介して大ガラス海カタツムリと会見した先生は、ポリネシアの計略通り、その透き通った真珠貝でできた殻のつって海底を散歩しながら、クモサル島を後に旅の

目的を達成したのであった。

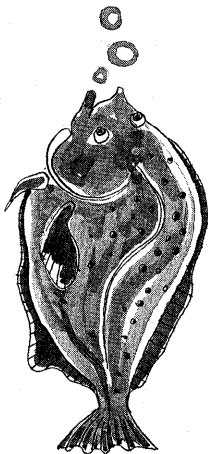
さて、この『ドリトル先生航海記』の全体を貫く特徴は次のようにまとめることができよう。

まず、動物との不思議な共生が実現するのは、ドリトル先生が動物語を話せることから、合理的な解釈が得られよう。つまり、物語では動物が擬人化されているのではなく、リアリティのある世界として構築されているのである。

次に十歳の子どもの目を通すことで、新鮮な輝きに満ちた驚異の世界が描かれる。特に先生の偉大さが際立ち、その魅力をさまざまに引き出しているといえよう。トミーにとって、先生は人間嫌いで経済観念のまったく欠けた、世の常識からはずれた人で、動物の救済と博物学の研究に純粋に没頭する理想の教師として映る。そして「トミー」とも「坊ちゃん」とも呼ばず、「スタビンズ君」と対等な仲間として扱ってくれる。西欧世界の外側に生きる旅先の「無知で野蛮な」住民には、近代文明（医学・

教育）がもたらす幸福を与えようと尽力する。いつもは静かで親切だが時として大胆不敵な戦闘者ともなり得る。

だからトミーは、そんな先生と動物たちの手厚い保護のもとで、危険や苦難に直面しないようになっている。少年の旅は、絶対的な権力で存在を脅かす父（神）への謀反でもなく、グレイト・マザーの呪縛からの逃亡でもないために、通過儀礼を経ての成



長は期待されない。もちろん、少年を厄介な心理状況に追い込む性愛の問題に目覚めることもない。

さらに付け加えるなら、この物語にあふれるユーモアは、人間性に対する不信を表明したり、社会の欺まんや矛盾を摘発し、日常性の基盤を揺るがすほどの衝撃力はもたない。

一言でまとめると、物語を通して安定した調和的世界が紡がれている点、が大きな特徴といえよう。だから、何も怖いことやイヤなことが起こらないので安心して読めるのが、この本の最大の魅力といえるのだ。

では、次に動物が活躍する場面を三つほど挙げて分析してみよう。

世捨て人のルカの無実を証明するため、事件の一部始終を見守っていた飼犬のポップが、証言台に立つ場面をみてみよう。そもそも、こんな意表をつく設定が可能となったのは、先生が裁判の聴衆の前でポップの通訳を買って出たからである。ちなみに

先生の力量を試すために、裁判官の犬に裁判官が前日食べた夕食のメニューを尋ねる試験がある。この場面のおもしろさは、動物からみた人間世界が暴露される点にある。人間の悪巧みを真摯な眼差しが見つめていたことに内心動揺させられ、とりまじした法の番人の俗物的な一面を揶揄する犬の茶目気に脱帽してしまふ。この他にも動物の身の上話が多く紹介されるが、人間世界が動物たちによって反転させられる驚きが、笑いを誘うのだろう。

また先生が、自由を奪われて幽閉させられたり、人間の都合で酷使させられている動物を救助する挿話が必要といていいほど盛り込まれている。例えば、闘牛を動物虐待だと憤慨する先生は、牛たちと共に謀して闘牛をやめさせようとするくだりがある。読み手によって受け止め方は違うだろうが、私の場合、動物愛護の主張に共感したというよりも、異国の大舞台での先生と牛たちの一大パフォーマンスに感激した。人間と敵対関係にあるとされ打ち倒すべ



前後の社会的背景に目を向けてみよう。一九二〇、三〇年は、近代動物園の歴史においても、もっとも華やかな時期にあたるという。一八二八年に開園されたロンドン動物園や一八九五年のニューヨーク動物園にみるような、動物を種の法則に従わせて分類し柵に閉じ込めて展示公開する方式に疑問がもたれはじめた。一九〇一年にハンブルグ郊外のステリゲンに設立されたハーゲンベック動物園は、①採算を度外視して大規模な動物捕獲隊を各地に派遣し、②熱帯の動物をヨーロッパの気候に馴化させる方法を考案、③動物を心理的に誘導する調教法により動物のショウビジネスを成立させる、④無柵式の動物舎をつくりだし、それらを巧みに組みあわせることにより壮大なパノラマを構築する、⑤動物の展示に野生における棲息環境を再現し、地理別に展示する、など次々と革新をもたらした。(ちなみに日本では多摩動物園がその最初の実践例) 動物の生態への配慮を視覚的に演出する、動物園経営の出現が、

『ドリトル先生』シリーズにどのような影響を及ぼしたのか、ここで性急な判断をくだすことは避けた。また、この一例から示唆される動物と人間の関係の変化が、子どもの文学にどのような新しい可能性を切り開いたのか、疑問は深まるばかりである。しかし、こうした動物園経営の歴史的側面にも目を向けない限り、動物作品の魅力は解明できないのではないだろうか。

『ドリトル先生航海記』のあの、動物と人間との裏切られることのない信頼関係で結ばれた閉ざされた至福の世界は、シリーズ後半でどのような展開をみせるだろうか。初期の作品と比較して、ドリトル先生の月旅行は暗い影をおとしているか見え、動物と人間との安定した調和的世界は内部から破綻しかけていくようにも思われる。それはなぜなのか。動物の活躍する子どもの文学の魅力を探る私の旅は、まだまだ続きそうだ。

(お茶の水女子大学大学院)